慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済史の学理的研究
Sub Title	
Author	瀧本, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1927
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.21, No.4 (1927. 4) ,p.445(1)- 466(22)
JaLC DOI	10.14991/001.19270401-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19270401-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新に御入學の皆樣へ

樂しい春が訪れて來ました、
皆樣には新學期の御仕度で
さぞ忙しい事と存じます
當中島洋服店は慶應義塾御用
仰付けられて今日迄貳拾五年間
皆樣に御滿足を與へて來ました
當中島洋服店は
昨年も慶應で第一等の
好成績を上げました
當中島は皆樣と伴に學び
共に勉强する洋服屋です
どうぞ皆樣の洋服屋として
安心して御用仰付け下さい
御一報次第直ちに
參上いたします

慶應御用 芝區三田四國町二ノ三
中島洋服店
電話高六二一三

メガネ
の御用は
正確にして
廉價な

慶應義塾大學病院指定
紫鳳堂眼鏡店
麻布材木町電停際
電話青山七四七〇番

三田學會雜誌 第二十一卷 第四號

經濟史の學理的研究

瀧本誠一

吾人が經濟史を研究するのは、研究其の事の爲めにするにあらず、之を研究して得たる結果を經濟學上に利用せんとするに過ぎないのである、即ち換言すれば現在自分の胸中に横つて居る或る經濟問題を歴史上の經驗に照らして解決するの目的に利用せんとするだけのことであつて、史實の研究其の事が最終の目的ではない、故に經濟學者が經濟史の研究を必要とするのは全くこの目的を達せんが爲めであつて、これを閑却して居つては經濟史研究の意義を爲さないであらう。

例へば古代の土地制度を研究するものが封建制度發生以前に歐洲諸國に行はれて居つたマーク制度若くはマナー制度の性質組織特徴等を詳かにし、是等の制

度は各國夫れ〳〵如何なる事情の下に何年代頃に發生し、如何なる沿革を經て如何に發達したかを精細に研究し、之を著作若くは言論に發表しても、唯たそれだけの事では其の研究の結果は自分の爲めに何等の用をも爲さず、如何に苦心し如何に努力しても、學者の研究としては全然無意義の勞作である、德川時代の經濟史を研究すべく、自任する者が札差の經濟上の地位を云々し、十組問屋の舊規慣例を叙述し、米價の平準を得せしめんと努力したる種々の劃策沿革等を古き記錄文獻等に徵して搜索檢討することは經濟學者が其の學說を考定案出するまでの豫備行爲として、固よりやらねばならないことは云ふまでもなしと雖も、唯た單純なる既往の史實の研究に止まつて、其の結果を自家の學說上に利用することをしなかつたならば、宛も我は大工であると言まへする者が、諸方より立派な材木を聚集して、家屋の建築にも取り掛らずと、徒らに其の材木を眺めて喜んで居るに異ならないであらう、何等の學說をも立てないで、史實のみに沒頭するものは、この自稱大工と何の擇ぶ所はなからふ。

プロセロウ博士は近世著名の歷史家ジョン・ロバート・シーレー博士の紀念論文（シーレー英國政策發達史に附載す）に於て「シーレーが此の講義錄に記述して居る史實は、大抵皆既に世上に知られてある事柄であるが、彼が是等の史實を巧みに利用して居る點は、最も嶄新である、歷史上の細目に涉ることは、Generalisation（概括）の基礎としての外、彼に取つては何等の價値も認められなかつたのである、歷史を取扱ふときには、彼は常に其の眼中に一定の目的をもつて居つたのである、即ち學者の注意を必要とし、又政治家に於て應用し得べき或る問題の解決若くは或る主義の設定を期圖して居つたのである、概括なき談柄に止る單純なる歷史は、彼に在つては何等の興味もなく、全然研究に値ひせざる詰らぬ事柄であつたのである」と評して居るが、プロセロウ博士のこの言、シーレー博士のこの態度は、經濟史を研究する我々に於ても、大に心得べきことであつて、一定の目的もなく、唯た漫然と史實の細目を穿鑿し、其の結果意外に面白き新事實を發見したりとするも、それだけのことに止つて、學者の研究即ち學說を立つるが爲めの研究とは云へないであらう。

深山幽谷を當途もなく、滅多矢鱈に徘徊して居つたならば、或はひよつと僥倖で黃金の鑛脈を發見しないとも限られないであらうが、それと同じく學界に於ても、

亦何等の目的もなく或る事柄の研究に沒頭し、古文書を繙へし舊記錄を檢するなど、一生懸命に漁さつて居つたならば、偶然に何にか貴重の獲物がないとも限らないのである、故に學者として閑暇があつたならば、芝居でも觀ようか義太夫でも聞うかと云ふ場合に、それをしないで手近かにある古文書や舊記錄を拈くり返へして樂むことは、勿論咎むべきことにあらざるのみならず、若し斯くして萬が一にも或る眞理を掘出し得たれば、それこそもつけの僥倖なるべしと雖も、學者の歷史的研究と云ふものは、そんな目暗打ちを當てにしてやるべきものにあらず、豫めしかと一定の目的を立てゝ、其の目的に利用するの覺悟に依つて、史實の檢討撰擇を爲さねばならないのである、自分の懷抱する問題を解決するが爲めにもあらず、自分の學說を確かむるの裨益にもならざることを、徒らに穿鑿するは、學者の態度として我々の取らざる所である。

今茲に一例を擧げて見れば、或る經濟學者が土地の國有若くは共有制度を是認し、其の己が說の、社會に有利にして、而かも今日に實行し得べきことを確かめんが爲めに大古我が王朝時代に行はれたる班田法や德川時代に於ける地割制度などを研究し、此等の法制が時代を異にする今日と共通の事情の下に實行せられたるものなるや否、又果して如何なる效果を齎らしたものなるや否を明かにして、自說を裨補するの一助たらしめんには、其の研究は學者の研究として大に有意義のものなるべしと雖も、原來自分には土地の國有若くは共有制度に就き、更らに何等の意見もなく、又何等の問題も持たずして、昔しはどうであつた、こうであつたと唯たその史實のみを穿鑿することは、研究の爲めに研究するのであつて、自分の學問の爲めには殆んど無用の勞に屬するのである、歷史上に於ける遠き過去の事實は事實そのものとしては何等の價値をも有しないのである、我が經濟學の如き無形の科學と理化學の如き有形の科學とは其の法則に於て根本的の差異ありとは思はれざるも、無形の科學の研究に於ては完全なる實驗を行ふことの不可能なること、即ち全然同一事情の下に同一の實驗を繰り返へすことは絕對に不可能なるが故に有形の科學に於けるが如き比較的精確なる法則をフォールミュレートすることは固より困難なるも、兎に角其の無形と有形とを問はず、あらゆる科學の研究の、最終の目的はこの法則の發見にあることは言を待たないのである、而して總ての學者

は皆その研究の結果、この法則の發見に成功するかと云へば、それは勿論そうではなくして、古來學者の研究の大多數は皆この點には不成功にして、兎も角も或る科學上の法則を發見すると云ふことは千百萬人中に一人も期し難いのである、故に實際に於ては眞の學者として尊敬に値ひする者は古來其人に乏くして、到底尋常の讀書人に期待することは出來ないのであるが、而かもそれにても、學問上の研究に從事する以上は、其の結果成功しても、しなくつてもこの法則の發見を以て目的とせねばならないのである、良し法則などゝ云ふ程の大望はなくとも、何等か一定の學說を打立つる爲めの研究でなければ、何の用にもならないのである。

學者の研究に缺く可らざる重大のことは史實々驗の類推概括の手續である、種々の史實を分析類別し、數回の實驗を繰返へし〳〵して、結論を抽出することが、研究の重要の手續なるも、この手續を閑却して或る特種の現象のみを捉らへ、其の起原、變遷、經過等を有の儘に細調精査しても、それだけではほゞの事實の調査であつて、實は研究でも何でもないのである、類推概括の伴はざる史實の調査は、學者の仕事として見るべきものにあらざることは明かである、或る人々はこの問題に關し、こう云つて居る、學者の仕事は自ら學說を案出するばかりではない、他人の爲めに學說の資料を提供することも、亦學者の重要なる仕事の一である、故に自分が學說を立つるが爲めに利用する積はなくとも、史實を有りのまゝに詳く調査して、之を學界に紹介するは、學者に於て耻づべきことにあらず」と、成る程他の學者の爲めにそうした下働をして呉れる者あるは便利至極の事なれども、そんなことのみをして居る者が學者であるか否は一つの問題であらう、加之ならず學者の爲めに資料を提供するは其人として洵に奇特の至りなれども資料その物は固より精確の撰擇を要するのであるから、各〻專門の學者より之を見れば、自分の學科に門外漢の撰擇した資料では殆んど其の用を爲さゝる場合が多かるべく、又多少其の學科に素養ある人の蒐集したる資料にしても、撰擇の標準が異つて居たら、折角蒐集して呉れても、其人の利用に應ずることは出來ないであらう、例へば大工が眞に自分の嗜味に投ずる立派な建築を爲さんとすれば自ら材木屋に行つて、用材の撰擇を爲さねばならないのである、多少の素養はあつても叩き大工の撰擇に一任して、其の持込むがまゝに之を使用して居るようでは到底貸長屋以上の建築は豫期し得ら

れないであらう、故に他の學者の爲めに資料を撰擇提供すると云ふことは、眞の學者の滿足を得らるゝ程度に之を實現することは中々容易のことにあらず、唯た多くの資料を其のまゝに提供して之を利用せんとする學者の撰擇に一任するだけのことは宛も材木屋が種々の材木を其の置場に陳列するようなもので、家屋を築造せんとするものゝ便利の爲めに必要の業務であることは勿論であつて、舊記を舊記のまゝ古書を古書のまゝに、學界へ提供して學者の檢討撰擇に便するは全くそれと同じことにして、何人か學者の爲めに此の材木屋の勞役を取らざるべからざることは云ふ迄もないのであるが、而かもその材木屋さんがこれ以上に進んで、研究じやの、考察じやのと自分勝手の考證を付して、學者の資料に充てんとするは、之を企つるものが充分に信頼すべき學者であれば兎も角も、然らずして漫りにそんなことを敢てするは、全然無用の骨折であるのみならず、却つて之が爲めに後進を誤るの害なしと云ふ可らず、勿論前に云へる如く自分の學說を打立つるの目的を以てやることなれば固より研究も必要であり考察も缺く可らずと雖も、自分の利用の目的もなくして、他の學者の爲めにそんな入らざる事に努力するは、學者の態度として、餘り感心すべきことでなからうと思はる、故に我々經濟學を專攻する者が經濟史上の或る問題を研究するに於ては眞に研究らしき研究に從事して經濟上の法則の發見に努力するか、少なくとも現在自分の眼前に横つて居る問題の解決を試みんとするが如き或る一定の目的の下に努力せねばならない筈である、否らざれば全く研究の意義を爲さないのである。

從來我が國に考證家なるものあり、學者の中に分類すべきものであるか、どうかは知らざるも、兎に角滅多無性に考の字を有難がつて、何々考々々々と題する冊子を公にし、或る特種の事物を穿鑿吟味して得意に吹聽するもの少なしとせず、今學者を、物を製作する工業者に譬ふれば、此等の考證家はそれに原料を供給して呉れる重大の役目を負へる人々であつて、學界の爲めには勿論調法この上もなしと雖もこんな研究は學者が其の學說を打ち立つるが爲めの研究にあらずして、他人の爲めにする補助的の研究であるから、學者として學界に立たんとする者はそんな事のみに沒頭して、區々たる斷片的の事物に拘泥して居つては到底其の目的を達することは出來ないであらふ、然るに今日身を學界に投じて學者の間に伍せんと

するものゝ多くはこの考證家流の仕事を以て學者の本務と心得、宛も「事物起原」の編纂にでも從事するが如き態度を以て努力しつゝあるは吾人の最も奇怪とする所である。

德川時代に於ける學者の中には種々の專門家あり、神道家あり、佛敎家あり、儒學家あり、歷史家あり、文學家あり、有識家あり、系譜家あり、音韻家あり、兵學家、曆星家、算數家など種々の專門家ありて、各〻其の門戸を張つて大家を氣取つて居つたものなれども、大抵彼等の研究し主張する所のものは、其の專門に依つて對象とする事柄には各違ひあるも、多くは皆考證釋義の學にして、學と云へば學なるも、其の實は一つの統一した學說でなくして、斷片的の調査ぐらいに止まるのである、即ち吾人をして云はしめたならば、德川時代の學者は之を概括して、甲の種類か、乙の種類か、將た又丙か丁か、何れにしても、或る種類の中に屬する考證家たるに過ぎないのである、曾てドクトル、ファベルが「孟子の思想」と題する自著の序論に於て、歐洲人は支那人の思想を書けるものを讀んで種々の印象を得るであらふが、それでも其の支那思想の中に全體として纏つた學說を發見することは六づかしいであらふと云つて居るが、此の評語は我が德川時代の總ての學者に就ても、最も適切に當て嵌るの言である

德川時代の考證家として知られたる大家の中に最も著名なる者が二人ある、一人は伊勢貞丈（安齊と稱す）と云ひ、他の一人は岡本保孝（況齊と稱す）と云ふ、貞丈は江戸の人にして幕府に仕へ、保孝も亦幕府の士なれども明治の初年まで生存して昌平校の中博士となる、共に著作に富み、諸家著述目錄の所載だけにても、貞丈には百三十三部の著作、保孝には百九十九部の著作ありて、何れも有益の研究には相違ないよふである、貞丈は有職の事に長じ、其の著作中例の何考何考と稱するもの甚だ多く、三社託宣考、安閑紀錯簡考、世繼物語考、道風像考、和歌三神考、押字考、三種神器名考、源氏八領鎧考、武器考證、甲冑名考、逆頰箙考、愚得隨筆附考、倡呂衣推考、矢羽文考、空穗考、鞆考、辨慶七道具考、飾劔木也考、脇差考、綾文考、狩衣考、細長考、平禮考、長烏帽子考、烏帽子考、乘物考、赤烏考、三木三烏考、烏柴考、革類考、禁色考、尻籠考、驛路鈴考、蝦夷鍬先考、以上三十四考の外、何々解、何々辨等の名稱を付したる考類似の著作が大部分を占めて居つて、其の研究の功、偉なりと雖も學說として見るべきものは一つもある

ことなし、又保孝に於ては其の和漢の著作中、考の題名を冠するもの尚一層の多數を占め、周易註疏考、易音考、尚書注書考、左氏傳注疏考、左氏傳考、穀梁傳注疏考、公羊傳考、論語注疏考、孝經注疏考、經義述聞同異攷（攷は考に同じ以下皆然り）謚法考、九服考、親族稱謂考、荀子考、論衡考、新書考、賈子考本、說苑考、顏子家訓考、中論考、呂氏春秋考、晏子春秋考、淮南子音讀出典考、墨子考、申韓考、子華子考、程朱新釋攷、博士讀攷證、日本書紀攷文、續日本紀攷文、續日本後紀攷文、三代實錄攷文、文德實錄攷文、大鏡攷、增鏡攷、平治物語考、三種考、施藥悲田兩院考、御當家初例考、史記攷文、漢書攷文、漢書百官表攷、後漢書攷、續漢志攷文、續漢志百官志攷、新唐書攷文、晉書攷文、晉史乘楚史檮杌出典攷、逸周書攷文、國語考、國策遺考、戰國策攷異、春秋繁露攷文、通鑑考、通鑑節要編攷異、少微通鑑攷異、通鑑錄目次考、歷代避諱攷、明季清初事跡攷、稱號攷、姓氏考、姓氏急就篇押韵考、宋百家姓押韵攷、明千家姓押韵攷、清百家姓押韵攷、人名考、人名相對考、列女傳考、高士傳考、英雄記出典攷、輿地攷證、四夷考、國郡鄕名考、江戸地名攷、續漢郡國志攷、唐州府廢置考、本草沿革考、證類本草引用書目佚考、諸子瓊林頭末考、正續三綱行實頭末考、法華經傳來攷證、釋迦譜逐條出典攷、三寶感應錄考、譯經圖記攷異、妙法蓮華經考、安國論攷、寺社考、災異記出典考、沙石集攷、長明發心集考、西行物語攷、蒙求押韵考、冊府元龜頭末考、說郛正續頭末考、稗海頭末考、經籍考、經籍雜考、古書考、唐宋叢書頭末考、活板考、倭字考、發字攷、古音攷、古讀考、本朝和名攷異、斷前歇後攷、語釋考、說文解字段注考、同新附字攷證、段注幾部誤脫考、韵鏡攷、磨光韵鏡考、音韻考、落久保物語考、取替婆也物語考、今昔物語出典考、宇治拾遺物語攷、徒然草考、文選考、古文眞寶頭末考、白氏諷諭考、朗詠考、山家集考、月清集考、長秋詠藻備考、文字考、六書雜考、四譜考、琴操考、洞溟記考、西京雜記考、神仙傳考、水滸傳考、續齊諧記考、搜神記考、正續博物志考、簾中抄出典考、十訓抄考、十訓抄典故考、古事談考證、雜考以上一百四十考の外に考の題名はなきも存疑、辨誤、割記など命名して考と同じ樣に或る特種の事柄を穿鑿發表して居るのであるが、此の保孝も亦貞丈と同じく天晴れ考證の大家であつて、其の精力の旺盛なることは到底尋常の學者の及ばざる所である、而して其努力に成れる如上の諸考は何れも相當の價値を認むべきものなるべきや云ふまでもなしと雖も、今この兩人の研究に就き嚴正に之を批判すれば何れも單純に夫れ〳〵其事物の起原、來歷、典故等を調査したゞけの事であつて、其調査の結果を分析類推して自ら其の學說上に利用せ

んとしたものではなく、全く興に乘じて無意義に研究したものゝ如く思はるゝのである、若し否らずんば彼等の諸考の中に各〻夫れ〳〵何等かの脉絡を通じ、此の考と彼の考との間に相互の關係なかる可らざる筈なるに、事實左はなくして、皆切れ〳〵に分離した斷片的の小記錄に過ぎないのであつて、勿論各〻纏つた獨立の論文でもなく又統一した綜合體の部分品と見るべきものでもなく、宛も大なる材木問屋の廣き置場の此所彼所に、見事なる良材が積み重ねられて需用者の利用を待つゝあるに異らないのである、故に此の見地より之を觀察すれば貞丈や保孝の勞作は學界の爲に偉大の貢獻であり、學者の爲めには又最も有難き仕事であるも、彼等の勞作その事は學者の學問的の研究とは見とめられないのである、少なくとも著者其人が斯くの如き種々なる事項を穿鑿吟味して得たることを自家の打立てんとする學說に利用する目的ではなく、唯た嗜味遊興の爲めにやつて見たのであるか、或は始めより眞面目に他の學者の爲めに何等かの用に役立つべしと考へてやられた研究に過ぎないのであつて、こんな勞作其れ自體が自分の學問的研究にあらざることは明白であらふ、併しながら德川時代の學者として知られたる人々は漢儒と云はず和學者と云はず、其の他學派學風の如何に拘はらず多くは斯くの如き統一なき斷片的の研究を盛に續行して、それで學者の能事畢れりと信じて居つたような傾向があつたのである、新井白石、荻生徂徠伊藤東涯など皆何れも大學者中の大學者であつて、詩文や經書の注釋のみに沒頭して居つた腐儒輩とは大に其の撰を異にし居たることは何人も知る所であるがそれでも彼等は矢張り考證だけの學者であつて、白石の著作には田制考、貨幣考、車輿考、冠服考、職官考、決獄考、軍器考、文公家禮考、本佐錄考其の他考の題名あるもの、若くは題名はなくとも之に類する斷片的の研究が多く、徂徠には管子考、度量考、明律考、樂律考、滿文考等の雜著に富み、東涯は漢儒の中では最も著作の多い大家であるが、その著作の中に何考何考と考の題名あるものは數十部あるのみならず、釋、辨、錄、語其他種々の名稱の下に事實考類に入るべき雜駁なる小著作の數多くして、一々枚擧に遑あらざることは世人の認むる所であらふ。之を要するに德川時代の學者はどんな大學者と云はるゝものでも、殆んど皆斷片的特種問題の考證のみに從事し、經書のテックストの講釋以外に於ける研究は悉く自分の爲めにする眞の學問的の研究ではなかつたの

である。

學界に於ける如上の慣例は德川氏の季世、明治の初代、否明治大正を通じて昭和の現在に至るまで、世々代々因襲して不統一なる斷片的の研究を學問的の研究と誤認し、宛も錢譜に詳くして古錢の名稱、品位、由來、沿革等に精通して居ればそれで貨幣史の大家であるが如く思惟し、又やたらに古墳を發掘して、銅器、古陶器の類をほじくり出して、覺束なき鑑定を下しさへすれば、それで天晴れの考古學者であると誤解せられ、骨董家好事家などの從事すべき仕事と學者の勞作とを混同して彼此の區別を知らないのは、世俗の通弊である、横山由清氏の田制篇、錢貨篇、物價篇、戸藉篇、住居篇、貸借篇、質物篇、商法篇、本朝戸口考、貨幣度量權考、食貨志略、上古買賣起源此等の著作の中には他人と共著のものもあるべし）など云へる著作、若くは栗田寛氏の國造本紀考、國造族類考、氏族考、職官考、守護地頭考、戸藉考、莊園考其他の諸考など皆何れも學界に有益の著作なれども、横山氏の著作は左院及元老院に於て法律制定の際の參考資料として調査したるもの、又栗田氏の著作は光圀以來水戸學館の大事業とせられて居つた大日本史の資料として蒐集摘錄したるものである、故に横山栗田兩氏の著作は各〻正しく一定の目的あつて、之に利用するが爲めに勞作したるものにして、何れも如上の著書その物が獨立の研究として、統一したる一體の學說を形成するものにあらず、但し横山氏の田制篇は其の後附錄を併せて十一卷の大著作となり、稍や纒りたる土地制度史の形を具備して現はれたるも、これとても其の書名の上に明かに冠題せられてあるが如く舊典の類纂に過ぎないのであつて、適當に所謂る土地制度史とは謂ひ難いのである、横山栗田兩氏の外に同じく重要の研究に從事せられたる大家の中には、小中村清矩氏あり、黑川眞賴氏あり、何れも學海の大恩人にして、而かも我々經濟史を研究するものゝ爲めには横山栗田兩氏と同じく貴重の資料を提供せられたる人々である、然れども小中村氏にせよ黑川氏にせよ皆斷片的の研究に努力せられたゞけの事であつて其の研究の結果を大に自分の學問上に利用して新らしき學說を建てられたようには思はれないのである、即ち矢張考證家としての大家であつて、眞に學理的の研究を遂けられたツィンクァ（思想家）ではなかつたのである、而して此の時代の人々、此の學風の流域に於ては、これ以上に秩序の立つた學理的の研究は到底望まれなかつたのみなら

す、先づ考證と云ふ位の研究で、止めて置いてよかつたかも知れないのである。

然るに今日は最早考證のみに沒頭し、遠き過去に於ける或る特種の事物の起原沿革などを穿鑿吟味して、それで滿足すべき時代にあらず、眞に學者として學界に立んとする者は自ら進んで研究したる結果を正確適當に利用して、或る何等かの主義、何等かの學理を構成することに努力せねばならないであらう、或は學者自ら資料を搜索吟味するの暇なしとすれば、所謂る考證家の考證したるものを其の儘利用するも、一つの便法なるべく、現に世上には前記伊藤貞丈岡本保孝などを、始めとし、專ら考證のみに從事して學者の利用を待ちつゝあるもの少なしと爲さゞれば、此等の資料を類推演繹して、更らに新らしき學說を案出すること必ずしも出來ないとは云へないのである、然るに之れをこれ爲さずして誰れも彼れも何々考じやの、何々研究じやのと云つて、肝心なる學說の組立を閑却し、唯た單に其の部分品の製作にのみ努力するは決して學者の本分を完ふするものと云へないのである、他の學科に就いては姑らく之を問はず、特に我が經濟史の研究に從事する新進の學者が何れも舊式の研究法即ち封建時代より明治の初代にかけて大家の名聲を

藉かしたる人々の研究法を踏襲し、大局より觀察すれば一局部の小事實に過ぎざることを、さも深遠なる學說を取扱ひつゝあるが如く大仰に說明して、學者の能事畢れりと思惟するものあるは、學界の爲め遺憾の極みである、一體總ての歷史は結局ヘーゲルの所謂る哲理的の歷史にあらざれば何の興味もなく何の用にも立たないのである、何年何月にどんな事變があつた、何の國何の時代にどんな制度が行はれて居つたと、正確に判明したりとするも、哲理的に之を批判し說明して現在若くは將來に如何なる關係を有するかゞ分らなかつたならば、全く無意味の昔話であつて、伊藤痴遊氏の講釋にも及ばないであらう、況や何々考何々研究などの題目で愚にも付かぬ書籍目錄や骨董目錄みたよふのものを造つたり、若くは又社會の經濟的現象の一波紋に過ぎざる斷片的の事實に過大の重きを置きて仰々しく吹聽するに於ておや。

今を距る二三十年の昔話であるが、當時漢學の大家として知られたる先生、三人相携へて箱根の溫泉に遊び、一日相共に起て浴場に赴きけるに、一人の老人先づ在り、三先生の來るを見て傍に避け、恐縮して事を辨じ居たるが、先生等何れも傍若無

人に談笑しながら、宋板の史記がどうだの、尙書の淸人の注釋はどうだのと、頻りに書籍の話を各〻物識り顔に談じ居たる時、如何なる機會あつてか、不圖其の傍に蹈り居た老人も、三先生の仲間に入り、新古書籍の話となれば、彼は本と云ふ本は何でも知らないものはなく、殊に支那の古書古典に就いては何を尋ねても、すら〳〵と答へ、何と云ふ書は誰の著述で何年代にどこで出版し、何卷何冊本が善本であつて、どの板本は宜しくないと云ふことまで皆知つて居るので、三先生相共に顔見合はして大に驚き、世の中には隱れた豪い大學者のあればあるものと感心したものゝ、浴場内の初對面にて、相方皆眞つ裸體のことなれば、互に名乘り合つて新交を訂する譯にも行なかつたので、其の場はそれで濟まし、互に慇懃に挨拶して別れしが、三先生は彼の老人は人間にまだ見たこともない大學者であるが、定めて圯橋の老人の類にてもありなんと相共に評判しつゝ、軈て浴場を出てゝ、三人の室に歸り、直ちに宿の番頭を呼出し、浴場に於ける老先生の素性を尋ねたるに、番頭は不審の顔にて、斯る大家の居らるゝ筈はないが、斯く〳〵の人相のお方なればそれは此の下坐敷に數日前より滯在し居るゝ、東京淺草の淺倉屋と云ふ本屋さんの御主人であると、云つたので、三先生哄然として絶倒せりと云ふ珍談がある、事實昔しの學者には本屋の主人にも及ばぬような人が多かつたのであるが、今日の新學者にも儘ま此の流の人が少なくないのである、現に余が先年日本經濟叢書を出版する際に今日經濟學に於て屈指の大家と認められて居る某先生が拙宅を訪はれ、日本の經濟書の事に付き、種々尋ねられたるに付き、書齋の架上を指して、あれは何の誰が著はした何と云ふ本で、内容は云々の件が書いてある、是れはどう云ふ本であり、彼はこう云ふ本であると云つて、數百種の本を見せたら、其の先生は大に感心せられた樣子で歸られたが、其の時其の先生は余を相當の學者であると思はれたのか、爾後は余に對して全く冷かしの氣味でなく、眞面目に先生々々と呼ばれ、眞に過分の取扱を蒙つたのであるが、余は心中竊かに耻入つて居つたのである、さて愈々經濟叢書を發行して見れば、余は全くこの叢書の編輯だけで日本の學者の仲間が出來たように人々に云はれ、他人の著作を集め、他人にそれを出版せしめたゞけの事で、學者となれ得るならば、學者ほど造作もなく他愛もなきものはないとつく〳〵思つた位の事であるが、日本の學界がこんなことであるとしたらば、學者の前途はまだ〳〵

遼遠であると云はねばなるまい。

話はちと横道にそれたようであるが余は今此の論文の終りに臨んで、再び前言を繰り返す、余の本文の主旨は經濟史上特種の問題の研究を不可なりとするにあらず、或る制度或る現象若くは或る事實に就いて其の沿革、來歴、組織等を特に吟味穿鑿しても、之を系統的に類推して學理の上に利用する目的でなかつたならば、學者の研究とは云はれないと云ふのである、事物の考證は學者の爲めに最も必要であるも、考證其の事は學者より之を見れば學理を證明し確立するの資料であつて、この目的以外には如何なる考證でも學者に取つては全然無用の勞作である、余は世上に學者らしき考證家多くして、考證を學理の研究に利用する眞の學者に乏しきを遺憾とするのである。

勞働階級の覺醒とフィラデルフィアに於ける政治運動

園　乾　治

一、勞働階級覺醒の原因

アメリカに於て勞働者が一つの階級として彼等の利害に對して覺醒するに至つたのは一八二〇年代の末のことである。此以前に於ても勞働者の不滿の念は時々孤立的な突發的なストライキとなつて現はれた。然し乍ら職業を異にする者は未だ相互扶助の利益を知らず、共同の目的の爲に永續的な團結を維持することはなかつた。即ち彼等の間には未だ階級意識が存在せず、勞働階級の共通の利害に覺醒しなかつたのである。夫故に當時の勞働運動は眞の意義に於ける勞働運動とするには尚ほ不十分な點があつた。（是等初期の勞働運動に就ては本誌第二十卷第十二號所載の拙稿「アメリカに於ける初期の勞働組合と勞働爭議」を參照